瀬戸内　シンポジウム基調報告

岡山支部　　河　野　通　博（岡山大）

一、瀬戸内海は汚れている

ここにお集まりの皆さん。皆さんのうち大部分の方は子供の頃から瀬戸内海を見馴れていられると思います。今２０才前後の青年の人も小学校１，２年の頃瀬戸内海沿岸で泳いでいて，そんなに汚れているとは感じられなかつたと思います。もちろんもうその頃でも港の中は多少汚れて，油膜が光つていたり，西瓜の皮が浮いていたとは思いますが，何万尾もの魚が白い腹を見せたり，おばけハゼが釣れたり，何キロもの間赤潮が海面をおおつたり，網にかかるのはビニールばかりで魚がいないと言つた現象はなかつたと思います。このような現象が瀬戸内海沿岸で広く起りだすのはここ１０年ばかり前からです。特に全面的に激しくなつたのは５年ほど前からと考えてよいでしよう。もちろん大阪港付近は戦前から黒い海でしたが，堺の浜寺や西宮海岸では十分海水浴が楽しめました。西宮では地曳網もありました。こう云つた各地の汚れ方の具体的な進み方は現地に長い間住んでいた人達が一番よく知つています。どうか皆さんが記憶を呼びおこして，いつからどのような汚れが出て来たかをまとめて，記録しておいていただきたいのです。例えば，藻があまり生えなくなつたのはいつからか，海底に鼻汁のようなドロリとしたものができて，網が引きにくくなつたのはいつか，海水が茶色になりはじめるのはいつか。こういつた汚染の進み方をこまかく記録してください。それが海を汚した原因をつかむために大切なことです。

二、どうして汚れて来たのか

まづ申し上げておきたいことは，瀬戸内海は一たん汚れると，なかなかきれいにできない海だと云うことです。外海には海流と言う一定の方向に流れるはやい流れがあり，汚染物質を沖合に運んでゆきますが，瀬戸内海には潮の満干による流れしかなく，　それも狭い海峡では速い所もありますが，灘のように袋の奥のような海面の水はなかなか入れかわらないし，流れもおそいのです。そのためヘドロの沈澱には適していますが，汚れた水はなかなかきれいになりません。

燧ではヘドロやその他の海水を汚している物質はどこから来るのかと言うと，それは陸上からです。昔に比べて海水を汚す物質がふえたと言うことは，陸上で大きな変化が起つたからです。それは何か。言うまでもなく，激しい勢で瀬戸内海沿岸に工場が建設され，大量の水と原料，燃料を使つて操業をはじめ，その結果，大量の工場廃水が流し出されたからです。工場ができると都市の人口も増加します。これらの都市から出る下水つまり生活廃水も海水汚染の原因の一つです。瀬戸内海沿岸の都市で，下水道ならびにその終末処理施設が完備している所はないのです。（一部を処理している所はありま

すが。）それに大量のごみまで海に流れて来ています。

ではどんなものが流し出されているのか。都市下水や農村からは野菜屑や台所の汚水が流されます。人間の排泄物も下水から，或いは直接海に捨てられます。これらのものは主に動，植物質の有機物で，次第に分解してゆきます。海水に溶けている酸素の力で分解が進み浄化されるわけですが，もし有機物が多すぎると，酸素が足りなくなつて，不完全分解を起し，硫化水素のような有毒ガスが出ますし，また酸素不足のため，ノリが育たなかつたり，魚が住めなくなつたりして漁業に影響します。パルプかすも同じ植物質ですが，紙，パルプ工業の廃水には，化学薬品も含まれますから全く同じとは言えません。有機物に比べて水中の溶存酸素が少いと，水は汚れて，次第にドブ川のようになつてゆきます。大阪市内の河川がよい例です。だから，陸上からはこんな有機物を下水の終末処理場などで十分に分解させ，きれいな水にしてから流し出さねばならないのです。

海を汚すものには，有機物のように分解しないものがあります。鉛，水銀，カドミウム，ニツケル，放射性物質などの重金属がその例で，ほとんどが工場廃水に含まれています。工場廃水には猛毒のシアンも含まれていることがあります。水島で昭和　　年に何万尾もの魚が死んだのはシアンのためでした。重金属は魚や貝の体内に入つてたくわえられ，それがくりかえされると，だんだん蓄積量がふえ，それを人間がくりかえし食べると，人間の身体に大量にたくわえられて，発病します。骨が細かくくだけてしまうイタイイタイ病や，脳をおかされる有機水銀中毒（水俣病）はその代表的な例です。こういう重金属などはどんなに大量の水で薄めてみても，貝や魚の体内に濃縮されるのですから，工場からたれ流さないようにしてもらわなくてはなりません。水と油とよく言われる。油も水にとけないで海面を漂つてノリをだめにしたり，海底に沈んで魚を油くさく食べられないものにしています。

また沿岸の貯水場では外国から輸入したラワンなどの大木の樹皮が海底に沈んで，海を汚し，魚のすみ家を奪つています。海底にへばりついているビニールも魚のすみ家も奪い，ヘドロの分解を妨げています。

弐　何故最近になつて汚染は進んだのか

先に海がひどく汚れるようになつたのは１０年ばかり前からで，それは瀬戸内海沿岸に多くの工場ができたからだと言いました。ではなぜこの頃から工場ができたのでしようか。日本の工業は敗戦の時は潰滅状態でした。アメリカでは日本の工業の復興をなかなか許しませんでしたが，アジアで戦争する必要から，日本の工業を復活させることにしました。昭和２５年の朝鮮戦争をきつかけに，日本の工業は目ざましく進み，昭和２８年には戦前の水準を上廻りました。しかしそれまでは日本の工場は京浜・阪神・中京・北九州の四大工業地帯に集中していたのですが，昭和３０年前後から，瀬戸内海沿岸に新しい大工場が作られはじめ，特に昭和３５年からさかんになりました。これらの工場の特色は，①三井・三菱・住友はじめ大資本の会社の工場が中心になつていること，②製鉄と石油化学が

主力であること，③原料を外国から輸入するため，大型のタンカーや鉱石運搬船の入れる港に接した臨海工業地帯にあること，④あまり人手のいらぬ，オートメーション工場で，巨大な工場敷地をもつこと，⑤各県や市が誘致したもので，誘致の時に港，工業用水，工場用地，道路，鉄道などの建設や提供を約束し，手厚い援助をしていること，などがあげられます。瀬戸内海沿岸にはそのほか戦後多くの紙・パルプ関係の工場が作られ，また自動車工業も発達し，メツキを含む関連工場を多くかかえこんでいます。また化学せんいの工場が多いことも指摘できます。

これらの工場が続々と建てられたのは，既成の大工業地帯では地価が高く，広い工場敷地が得にくいことや交通の混雑のはげしいことなどのため，原料をはこぶ巨大なタンカーの横づけできる工場用地を県や市に作らせて，安く，広い土地の手に入るところに大企業が原料加工工場を作つたからです。ところが大企業がそれぞれ，西日本の生産拠点として瀬戸内海沿岸にこんな工場を競争して作つたため，私たちはどこへ行つても製鉄所や石油工場，石油化学工場ばかり濫立すると云う目にあわされることになりました。しかもこれらの工場は最新鋭の世界で一，二を争う大熔鉱炉や最新の石油加工設備を自慢していますし，莫大な工業用水を使つて，今までの工場とケタ違いの量の鉄や石油製品を作つていますが，それだけに煙突から出るガスや工場廃水の量も大量で，しかもその処理が不十分なのです。まづもうけを第一とし，人に迷惑をかけないようにすることは二の次であると云う態度です。これは紙・パルプや化学せんいの大工場でも同じです。中・小企業は大工場に比べて，資本が少なく，しかも親工場の景気変動のしわよせを強くうけて，経営が苦しいと云つたことからよけいに工場廃棄物の処理がお粗末です。

一方，県や市は大きな工場に来てもらうと，財政がゆたかになり，県民もたくさんやとつてもらえると言うので，工場に来てもらうために港や工場用地を作り，また山奥のダムに工場用水を貯え，広い道をつけて，沢山の金を使いました。その結果，地元住民へのサービスはおろそかになり，下水道の整備は大変おくれました。そんなにしてまで工場誘致をしたのに，工場の来た市や県ではどこも赤字がふえ，しかもオートメーションの進んだ工場なので，期待したほど地元の人はやとつてもらつていないのです。その上に海を汚され，ぜんそく患者がふえ，おばけのような魚や重金属を含んだ貝が出現し，タンカー事故がおきると一面火の海になるような危険まで出て来たのです。こんなにまでして工業を「開発」することは正しいことなのでしようか。公害のおきた理由はこんな形の「開発」にあつたのだと言えます。私たちが明日「開発」の問題をとりあげるのはこんな理由からです。その上，今国が計画している新全国総合開発計画では瀬戸内海の西部にもつと大がかりな工業地帯を作つたり，瀬戸内海の入口にあたる豊後水道の宿毛湾に５０万トンのタンカーを入れる原油基地を作ることが考えられています。徳島県でも鳴門と吉野川河口との間の沖合に大人工島を作り，工場を誘致する計画があります。今のようにたれ流しを放置するやり方のままでこんな巨大な工業地帯ができたら，一体

瀬戸内海はどうなるのでしょうか。政府は私たちの瀬戸内海を産業運河としてしか考えていないのではないかとさえ思われるほどです。だが瀬戸内海ではたくさんの漁民がくらしをたてているのですし，私たちがほこりにして来た世界の公園瀬戸内海は一体どうなるのでしょう。

四　本当の地域開発とはどんなものか

廃液を垂れ流す工場が瀬戸内海沿岸にたくさん進出して来たことは本当に困つたことですが，だからと言つて工業と言うものがそもそも怪しからんのだと言つた議論をするのもおかしいのです。もともと工業と云うものは私たちのくらしをゆたかにするための産業なので，その点では農業や漁業と変りはないのです。ところが現在の工業生産はそのような国民に奉仕する社会的責任よりも，まづもうけることとか，世界的な大企業に追いつこうとか，企業第一主義になつて，社会的責任を軽くみているところに問題があります。国や県・市も住民の福祉よりも進出企業に対するサービスを重く見すぎているのではないでしようか。もつときびしく企業の社会的責任を追求すべきなのですが，それがされていない所に行政の欠陥があります。

本当の地域開発とはまづその地域に住んでいる人々の生命を守り，生活を向上させて，一人ももれなく健康でゆたかな暮しができるように努力することのはずです。工業開発もその限りにおいて必要です。ところが今の地域開発は住民の利益よりも企業利益を優先する工業開発に堕しているところに問題があります。しかも県や市は誘致競争を有利にするための条件として，一そう企業にサービスする事業をやつて来ました。本来なら企業が自分でやらなければならない工場用地の埋立や，工業用水の取水，製品運搬用の道路づくり，さては社宅用地の造成までサービスしているところもあります。それだけ住民への奉仕がおろそかになるとともに公害に対する強い規制もなされませんでした。地域住民の強い要求にあつて，やつと公害の取締りに手をつけたばかりで，まだまだ全力をあげて公害をなくする方向に手をうつところまでは行つていません。私たちはもつときびしく，地方自治体や企業に国民の生活と生命を守らせるよう要求し，監視しなくては，自分を守ることさえ困難になつているのです。

今のところ工場は公害の加害者です。では工場に働いている人はみんな加害者なのでしようか。そんなことを言えば，農薬を使う農民も，ごみや屎尿を海に流す市民もみんな加害者と云うことになり，日本国民で加害者でないものはいなくなります。公害は皆の責任だと言う議論つまり一億総加害者論がここから生れて来ます。ほんとうにそうでしようか。

農民は農薬をまけば作物を通して人間に害を与えると知りながら，有毒な農薬を使つていたでしようか。市民はビニール公害がこんなにひどくなるという見通しをもつて計画的にごみをすてたのでしようか。全くちがいます。工場労働者も上からの命令通り動いたにすぎません。その上外部に公害をまきちらす工場で，労働者だけが完全に被害から守られているはずもないのです。工場労働者も被害

者なのです。我々の仲間なのです。この点を工場労働者にはつきり理解させれば，工場内からも公害反対の声が出てくるはずです。

私たちは工場労働者も含めて，地域に住む人々の生命とくらしを守る真の地域開発の実現のために，公害をなくすために努力を続けなくてはなりません。

五　では，公害をなくすためどんな努力をするのか

今のところ，工場も地方自治体も工業化優先の地域開発，企業の利益を守る工場の操業と云う考えが強く，国民に対する社会的責任を最優先すると言う立場からは程遠いようにさえ感じられます。では私たちはどうすればよいのでしようか。

私たちは日本の国の主権者です。私たちが主権者である以上，国や県や市は私たちの要求をきく責任があります。企業も国民の９０％以上にあたる私たちみんなの生命と生活を守る義務があります。ただ国や地方自治体に責任を果させ，企業に私たちの要求をうけ入れさせるためには，一人一人ばらばらに要求しても強い力にはなりません。やはり皆が団結し，一致して要求をすべきなのです。住民運動と言うのはそう言う性質のものです。ただその場合気をつけていただきたいのは，公害で被害を受ける程度は金のないものほどひどいと言うことです。貧しい人ほど，公害を防ぐ設備もできないし，病気をなおすのも困難です。長い間の生活の苦労で身体も弱つているかも知れません。こう言つた公害を一番うけやすい人を公害から守り，生命とくらしが守れるようにすることが住民運動の使命です。そしてできるだけ多くの人々が自分でたち上つて共同の要求を出してゆくことが，住民運動の成功の条件です。それとともに運動を正しく発展させ，長つづきさせるとともに，要求する相手を納得させ，反論できないようにさせるためには，どうしてこんな公害が起つたかを理論的に明らかにする必要があります。そしてその理論を一人一人が正しく身につけることです。この点は私たち科学者が住民のお手伝いができる分野です。

六　シンポジウムの成功のために

私が今まで申し上げて来たことはいわば一般論です。実際には具体的に公害が起つてくる原因はなかなか複雑で，まだわかつていない点が多いのです。だからこの原因をつかむためにも現場付近でくらしていられる住民と科学者が力をあわせる必要があります。また公害が生れる社会的な背景や，公害を起した側のいろいろな事情も明らかにする必要があります。そこに住民と科学者，自然科学者と社会科学者がどうしても協力しなければならない理由があるのです。また公害がおきた本当の理由を一そう具体的に知るためには，その工場で働く人々の協力がえられれば，なおさらよいことは申すまでもありません。私たちはこうして公害の起つた理由，その影響がどう拡がり，どのように私たちのくらしにひびき，生命がおびやかされたかを理論的に明らかにしながら，公害の絶滅を皆の運動で実現しなくてはなりません。

今日ここには自然科学者も社会科学者も住民代表も集つています。私たちはこの二日間の集会でお互いに学び合い，足りない点を補つて，明日の更に発展した運動の実現のため，ともに努力を続けようではありませんか。